幼児の絵本作りに関する研究
―物語を通した自己表現―

池田尚子
（那覇市立城西幼稚園）

【目的】

幼児が自分の考えやイメージを表現する１つの方法として，絵を描くという行為がある。遊びの中で，幼児は自由に絵を描いたり，周りにいる友達や大人に自分の描いた絵について語ったりする。そこに描かれる絵や幼児の語りは，幼児がこれまでに経験したことをもとに表現されているように見える。そこで，幼児の絵本づくりを通して，絵本に表現されている内容を分析することで，幼児のこれまでの経験から形作られてきた自己やライフストーリーが見えてくるのではないかと考える。本研究では，事例研究によって，幼児が物語る自己の世界について考察していく。

【方法】

期間：200X 年 4 月～200X+1 年 3 月（このうち絵本作りの期間は 200X+1 年 2～3 月）
対象：沖縄県内の市立幼稚園の年長児 25 名（男児 13 名，女児 12 名）
調査方法：幼稚園における活動の中で，一人一冊の絵本作りを行った。描く内容は自由で，自分で描いた絵に物語をつけてもらった。自分で文章を書くことができる場合には幼児自身で文を書き入れさせ，自分で文章をうまく作ることができない場合には，担任が物語を聞きとって，文章を作った。本研究においては，一人の幼児の育ちと絵本の内容について取り上げる。また，本研究は担任が行っている。

【事例】

1．女児Aの育ち

Aは年長児として入園するまで，保育経験がなく，家庭保育で育った。そのため，入園後は初めての園生活にとまどい，緊張する様子が見られた。登園時は泣くことが多く，日中の生活の中でも，困ったことがあるとすぐ泣く様子が見られた。

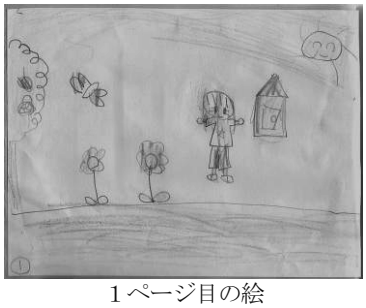
エピソード（4月）

入園式の翌日，遊びの時間が終わったあと，クラスで集まりをして，いろいろな話をしたり手遊びをしながら，お友達の名前紹介を行った。クラスにはもう一人Aと同じ名前の女の子がいたため，「Aちゃんと同じ名前なんだよ」と紹介したところ，Aはすくっと立ち上がり，同じ名前の子に近寄って，「なんであんたのおかあさんAってつけたの！」と怒りだした。担任はびっくりしたが，世の中には同じ名前の人がいることを説明した。Aはその場ではまだ怒っている様子だったが，その後は気にしなくなった。

新しいことを体験し，それを日々繰り返していくことで，Aなりに園生活を理解し，安定した気持で活動していけるようになった。夏休み明け頃から友達との関わりにおいて，自分の思いを伝えたり友達の思いを受け止めたりして遊ぶことができるようになった。１月頃から一人の子と親密になり，その子との関わりを深めていく中で，自信を持って生活していくようになっていった。

2．Aが作った絵本（2月）

①あるところにひとりのおんなのこがいました。
　そのおんなのこはひとりぼっちでした。
②おんなのこはすぐともだちができました。
③そのおんなのこはふたりでこうえんにいきました。
④ふたりはばけつをみつけて，おうちごっこをしていると，
　くもがくろくなってきて，
⑤そしてあめがふってしまいました。
　ひとりのおんなのこはおおきいはっぱをみつけて，かさのかわりにしました。
⑥そしてかさをてにもって，ふたりはわかれてしまいました。
⑦もうひとりのおんなのこはてをふって，またもうひとりのおんなのこも
　てをふっておうちにかえりました。
⑧またきょうもいいてんきだったので，ふたりはまたあって，
⑨こうえんにいって，またおうちごっこをして，きのうのばけつもまたありました。
⑩またひがくれてきたので，ふたりはてをふりました。


１ページ目の絵

＊数字はページ番号

【考察】

Aの絵本の物語では，繰り返しの毎日が描かれている。初めはひとりだった女の子に友達ができ，繰り返し遊ぶ，これは，Aが体験した園生活そのものあり，ライフストーリーだといえるだろう。絵本での物語について，さらに検討していくことで，幼児の自己の認識や語りついて考えていくことができると思われる。

（Shoko, IKEDA）